

星のひらの手

折目博子



折目博子

手のひらの星

著者略歴

昭和二年 京都に生まれる
昭和二十二年 京都府立女専国文科卒業
昭和三十三年 「よびこえ」で第二回準作家賞受賞
昭和四十三年 「ロトの妻」を昭森社から発行
現住所 京都市左京区松ヶ崎井出ヶ海道町三ノ一

手のひらの星

定価 四五〇円

第一刷発行 昭和四十四年九月二十八日

第二刷発行 昭和四十四年十月三十日

著者 折目博子

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽二一十二―一二

郵便番号 一一二

電話東京(九四二二) 一一一一

振替東京三九三〇

印刷所 豊国印刷株式会社

製本所 有限会社文信社

© 折目博子 1969 乱丁本、落丁本はお取替えいたします。

(分) 0-0-93 (製) 147969 (出) 2253 (0)

目次

手のひらの星

7

冬の旅

95

髪の毛を頬にたらしたアンヌと
髪の毛を頬にたらしぬアンヌ

145

ツイゴイネルワイゼン

189

装帧
村山豊夫

手のひらの星

手のひらの星

十時過ぎに電話が鳴った。私は、ペンを置いた。ゆうこの下宿からだ。

『ゆうこの部屋がガス臭い……?!』

私は、何のことかわからなかった。ゆるめていた帯を締め直し、戸外へ走り出た。

十字路に立って、私は車を探した。私は、大きな空の下で、自分がくると螺旋状に巻き上げられるを感じた。

月の光が青かった。私は車を乗り捨て、坂道を駆け上った。

私は、何も考えなかった。膝頭ががくがく震えた。白いペンを塗った低い木戸を押しあけ、まっすぐゆうこの部屋のある棟へ走った。

「ゆうこちゃん」

私は叫んだ。ベッドの上に仰向いて、蒲団を首までかけ行儀よく寝ているゆうこ。私はやにわに蒲団をはぎ、ゆうこを抱きかかえた。

そこにあったのは、ゆうこの「死」。ゆうこは、すでに冷たくなりかかっていた。

私は必死になってゆうこを抱き上げ、そのガス臭い部屋からゆうこを運び出した。部屋の中には、書籍やブラウスや花が散乱していた。

私は、救急車のくるまでの間、毛布に包んだゆうこを抱きしめて、坂道に坐っていた。私は、夢の中にいるように、自分を感じた。夢の中にいて、私はゆうこのふさふさと黒いおかつばを、撫でているのだった。

二人きりだった。私は空の奥処^{おくど}の星を見て、ふと、子守歌を歌った。眠れ、眠れ、母の胸に、眠れ、眠れ、母の手に……。ゆうこは、幼い時にそうしたように、じっと私の胸に顔を押し当て動かなかった。

人声がして、月影の中を白い上っ張りを着た人が上ってくる。こちら、こちらと、下宿の奥さんが案内してくる。

見知らぬ人に抱きかかえられ、ゆうこは担架に乗せられた。坂を下りた所に、救急車が止っていて、ゆうこは担架のまま、その中へ運びこまれた。私は、そんなゆうこが可哀想でたまらなかった。

私は急いで救急車の後尾から、ゆうこの傍^{かたわ}らへ坐った。

中にいた白衣の人が、ゆうこの顔に酸素吸入をした。ゆうこが死んだ?! ……。

私は、急に恐怖を感じた。車が振動するたびに、ゆうこのゆたかな黒髪がゆれている。

暗い夜の中を、救急車はサイレンを鳴らして、躍り上るように揺れながら進んだ。夜道はそのまま暗い黄路^{よみじ}につながり、果てしなかった。

病院の構内へ入ると、ガラス戸の入口だけが明るかった。下宿の人が連絡しておいてくれ、宿直の医師が看護婦と待機していた。ドアをあけた所に、車つきの台があり、ゆうこは、すぐその上に横たえられて、人工呼吸が試みられた。

ゆうこは眼を閉じて、なされるままだった。黄色いセーターは無残に缺て切り開かれ、ブラジャーも二つに切り離された。なにかが押し上げてきて、私は喘^{あえ}いだ。私の胸は激しい苦痛に爆発しそうだった。

『なぜ死ぬの？ なぜ自殺するのよ！ 馬鹿！』

『生きて、生きて、後生だから、もう一度！』

帯を締めた私の胸は万力で押さえつけられたように息苦しく、私は肩で喘^{あえ}いだ。

『ゆうこ、ゆうこちゃん！』

私は狂おしい感情を、あるだけの理性で押さえつけ、廊下の隅の赤電話をまわした。夫は、会合のあとどこにいろのかわからない。

暖い空気が渦巻いていた。ゆうこが死ぬというのに、私は生きて興奮していた。私の全身は緊張でビリビリと痛んだ。胸の疼痛はますます激しく、私は吐気を催した。

「駄目のようです」

人工呼吸の手を止めて、医師は時計を見た。

「それに……」

彼は、ゆうこの衣類をのけて、その背中をのぞきこんだ。

「ガス中毒特有の赤い沈澱がはじまっています」

私は私のよく知っているゆうこの娘らしくまるい背中を急いで包んだ。

「この若さで、なんと惜しいことを……」

年老いた看護婦は心から悲しそうに呟いた。私は、じっとゆうこの傍らに立ちつくしていた。そし

て、ゆうこのおかつば頭を、くりかえし、くりかえし撫でた。

車が止った。ガラスの扉を押し開けて、背の高い夫が入ってきた。黒っぽい背広を着、蒼白な顔に苦悩を刻んだ彼。夫は幽鬼のように、よろばい歩いて、ゆうこと私の傍らに來た。

「可哀想なことをした」

遠い声が聞こえた。

夏休みに入る前に、生徒会から連絡があつて、私に、ある文学座談会に出席しないかという誘いがあつた。二十年も前のことだ。

戦地から帰つた男子学生、動員を解かれた女子学生を集めて、戦後いち早く京都に出來た出版社、「S文学社」が「学生と文学」という題で座談会を催すというのだ。太平洋戦争は、一年前に終つたところだつた。私は十九歳で女専国文科在学中だつた。

眩しい夏の陽が四条麩屋町の狭い通りを照らしていた。私は、ともかく、小説をたくさん読んでいる人々という呼びかけには相当すると思つていたので、臆するところなくドアを押した。

刷り上げられた雑誌『世界文学』や、新しい訳者による外国文学書や、海外の作家の動きを書いたものなどが、本箱や机の上にあつて、私は人が集るまでの時間を退屈しなかつた。私の眼の前に、机を隔てた椅子に坐つて深く頭を垂れ、一心に本に読みふけている青年があつた。ゆたかな長髪に蔽われた頭を上げた彼は、壁際で本のナンバーを見ていた私に、すみませんがあの一冊を取って下さい

と言う。

座談会がはじまる時間がきて、学生たちは近くの喫茶店の二階へ行くことになった。しかし、ひとり本に読みふけっている彼は一向に気がつく様子がない。迂濶^{うかつ}な人だと思い、私は彼にそのことを教えた。

司会は、その頃朝日新聞の論説委員をしていたY氏だった。東大生、京大生、同志社生、三高生、府女専生が参加して、戦争中のこと、その精神生活、文学などについて語った。司会者はたずねた。

「真面目な学生が、わたしたちは戦死した友達の遺志をうけついで大いにやりたい、というようなことを言っているのをききましたが、どういう意味でしょうか」

東大生のMが答えて、

「どうということはありませんが、それは私の場合こういうことです。同じ日に入隊した友達と、入隊する前にお前が死んだら俺が書く、俺が死んだらお前が書いてくれと、話し合ったのです。その友達は、戦死してしまったのですが……」

日本にはヒューマンイズムの基礎がなく、あるのは平家物語の祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響きありといったふうな仏教的無常観だったし、使っている兵器は明治時代の三八式銃だったりして勝てるはずもなかった。せめて一億玉碎といわず、一億降服と言ってほしかったなど、学生たちは、日本が戦争に負けたことによって生き残った喜びを語った。

頭を垂れて本を読んでいた人は、ほとんど発言しなかった。しかし、不思議にベダントで饒舌な他の青年たちの群を抜いて、私には何か暗い魅力といったふうなものが彼には感じられた。彼は、戦争

中、自分が襲われつづけた死の恐怖、軍隊に入つて死んでしまうということのために、勉強の意味がわからなくなつてしまつた、というようなことを喋つた。

ソクラテスの、自分たちの勉強は、死のための演習である、ということばについて考えた、と話した。

私は、工場動員で三菱の兵器工場で働いていた時の体験と、主として私を形成した翻訳の外国文学による考え方から、作っているのが兵器であるということで、なぜ、人間と人間は争ひ血を流すのだろうかと考えた、と語つた。

「二度と戦争をしてはいけないということを僕達は学んだし、これからも決して忘れてはいけないと思います」

おとなしそうに見える彼の低い声の発言が、私の胸に残つた。

フランス文学をやつていて、ほんとうにわからない所はキリスト教思想です、ボードレール、あの人はカトリックでしょう、あそこがわからぬですよ、と饒舌なMが喋りまくつて、座談会はふたたび軽快な調子に戻つていった。

帰途、私を呼びとめる人がある。大股に近づいてきた人は、彼である。

私が座談会に行った、というだけでは、ゆうこは生まれるはずがない。彼が私を呼びとめ、私と彼は偶然帰途が一緒であり、しかも、興味が一致した。その日、私と彼は、なかなか電車に乗らないで、二人で座談会のつづきをやつた。熱気に照らされた夕方の烏丸通りを、私は、街路樹の茂みの下をくぐり抜けながら、コンパスの長い彼の歩みに遅れまいと熱心に歩いた。

私は、翌春、大学へ進学しようと考えていて、彼が専攻している学科について質問した。

その日、二人が話し合ったことを私は覚えていて、彼が専攻している学問は、まだ新しい分野でやりがいがあると彼は言い、それは自然科学的な方法論の上に立脚して仕事が進められ、社会の各文化現象、法律、経済、道徳、芸術にいたるまで相互の連関性によって規定されている、超社会的なものはひとつもないという考え方で、一口に言って相対主義です、と彼は言った。

「そんな相対主義の立場だったら、戦争もある時は正しく、ある時は正しくないということになるじゃあないの？」

私は不満に口をとがらせて背の高い彼を見上げた。

電車を降りる時、彼は手帳に自分の家の住所の地図を書き、それを私に渡した。

「気がむいたら遊びにいらっしゃい」

と言って。

学校は夏休みに入り、私は毎日、家で本を読みふけていた。ある日、私はその紙片を持ってぶらぶらと出かけた。畑の中を歩いてゆくと、彼の家は思いのほかに近かった。

私達はお互いにそれまでに読んだ小説のあれこれを話題の中に持ち出して再検討し、飽きることなく喋り合った。私が万葉集の歌が好きだというと、彼は新古今がいいという。私がトルストイが偉大だと思うというと、ドストエフスキーの方が面白いと彼はいう。二人の考え方や感じ方はたいへん異なっていたけれど、どこか本質的なところで共通点があった。私が和歌をつくっているというと、彼はそれを見せてくれという。

私が行かない日は、彼が来た。私は彼に小説を借り、彼は時々私にレコードを借りた。

春の巷に風のたち

赤いマフラーのひるがえる

人恋しさがなぜわるい

わたしは小さなグリゼット

うそだけはイヤ うそだけは

泣いてみたくて泣いたなら

しみ入るようなあの人の

眼が悲しくてまた泣いた

夕方彼は私を送ってくる時、「グリゼット」（お針娘）と題する彼の作詩、彼の友人による作曲のシャンソンを歌うのだった。ちよつと低級な歌詞だけれど、そのことが面白くも思えた。私は、うそだけはいや、うそだけは、と高い節になって彼の歌うその箇所が好きだった。軽快に口笛を吹いて、風に吹かれながら細い長身で彼はひよろひよろ歩いた。

夏休みがすんで学校がはじまる頃は、彼と私の交際はいよいよ本格的なものになっていった。私は、教科書をぶら下げたまま学校へは行かず彼の家へ行って、そのままだった。彼は大きな書物机に向って勉強していたが、私が行くと喋り出すのだった。時折は、彼の傍らで私も教科書を開いたことがある。英語の副読本は、ドライサラーの『アメリカの悲劇』を読んでいて、私はわからない所を彼にきいた。訳をつけてくれたあと、まるで楽しい遊びをするように彼は私に接吻するようになった。

七月下旬に座談会で知り合い、十一月末に結婚するまで私たちは毎日、出会った。彼が多少陰気な